

学生によるゼミ案内

～うちのゼミ紹介します！～

国際社会学部では、3年生からゼミを履修します。(注：指導教員が開講する専門演習が「本ゼミ」です。普段は「ゼミ」と呼びます) 教員の指導を受け、ゼミ仲間との議論を経ながら自分の研究を磨き、最後に卒業論文としてまとめることになります。

…といっても、ゼミの具体的なイメージがなかなか湧かない、という学生も多いのではないのでしょうか。そこで、既にゼミを経験した皆さんの先輩の声の一部を、ここに紹介します。ゼミ生の声から、ゼミの雰囲気を感じてみてください。



(地域社会研究コース 青木雅浩ゼミ)

なぜ論文を書くか。この問いが青木ゼミの出発点です。卒業論文を執筆する理由やその問題設定、実証研究の方法などについて、先生からのヒントをもとに意見を出し合いながら答えを探っていきます。その後個々人で卒業論文のテーマを設定し、関連するディシプリンや先行研究の傾向、具体的な研究方法などについて発表を通して検討を重ねます。少人数(2020年度は10名以下)のゼミなので、和気藹々としており発言もしやすい環境です！発表に対する質問や意見交換も忌憚なく行われており、その度に刺激を受け新たな発見があります。個人プレーで卒業論文を執筆するというより、先生からのご指摘を踏まえつつゼミ生同士で知恵を寄せ合い、互いの論文の質を磨き上げるべく協同する文化が青木ゼミには根ざしていると思います。青木先生ご自身のモンゴルでの体験談や、研究者としてのキャリアのお話を伺うことができるのも青木ゼミの醍醐味の一つですよ！(石橋実和子)

(地域社会研究コース 青山弘之ゼミ)

青山ゼミは、近現代の中東事情に関して、書籍の輪読、発表者による研究発表と、それを踏まえた討論という形式で行われています。政治、社会から文化まで、中東に関することなら何でも研究テーマにしてOKという、間口の広さが売りです。それだけではありません。青山先生による発表のフィードバックやゼミテン(ゼミ所属者のことを指します)との議論を通じて、論理的な思考力や論述力、適切な研究手法の選定など、地域研究及びアカデミアにおいて必要不可欠な基礎をしっかり身につけることができます。自分自身、課題と結論の整合性や各節の論理関係を意識して言葉を紡ぐことができるようになり、成長を実感しています。自身の抱く強烈な「興味」を、冷静で論理的な「学術論文」へと昇華させることができるのが、このゼミのもう一つの売りなのです。

中東に興味があって、純粋な知的好奇心をお持ちのそこのあなた！既に門戸は開かれています。(萩原優太)

(地域社会研究コース 大石高典ゼミ)

大石ゼミは、自分が生活の中で体験したことを通して考えるゼミです。例えばご飯を食べながら、友達と会話しながら、アルバイトをしながら、フィールドワークの手法を用いて人間の「生のかたち」を見ていくことが大きなテーマとなっています。専攻地域や研究テーマに指定はないため、ゼミ生の扱うテーマは自由でとても個性豊かです。

3年ゼミでは春学期に「フィールドワークへの挑戦」「調査されるという迷惑」の2冊の本を輪読し(読む本は毎年話し合っていて決めています)、秋学期には各自の扱いたいテーマについての個人発表を行いました。発表のテーマは食や宗教、音楽に関するものなど多様で、授業の度に新たな発見ができるような環境です。毎回行っているディスカッションにも大きな魅力があり、ゼミ仲間の言葉で新たな気づきを得ながら、時には方向転換をしながらも自分の研究を深めていくことができます。

大石ゼミには“おいしい”(OISHI)ゼミと銘打ったホームページがあり、ゼミ生のエッセイやおすすめ本などの記事も掲載されています。ゼミの雰囲気がわかりやすいと思うので、ご興味があればぜひ覗いてみてください。(玉井遥)

(地域社会研究コース 大石高典ゼミ)

大石ゼミのキーワードは「フィールドワーク」です。フィールドワークを通じて〈他者〉と出会い、理解し、時には自分自身のことも振り返ってみたりしながら、人間の生のあり方について考えます。したがって、研究テーマはゼミ生の興味・関心の数だけあるという、かなり自由度の高いゼミとなっています。

三年生の春学期には、みんなで本を一冊選んでそれを輪読します。秋学期には、各自が関心を持つ研究テーマや方向性について発表します。「ミャンマーのお弁当事情」「先住民とアルコール・ドラッグ」など個性豊かなテーマが飛び出してくるので、毎週が「おもしろい！」との出会いです。時には研究が停滞したり、関心が移り変わることもありますが、「まあそういうもんだよね」というのが大石ゼミのスタンスです。とにかくやってみること。頭だけでなく、身体や五感を使って学問をする。それができるのが大石ゼミの特徴であり、魅力でもあると思います。(田津真里恵)

(地域社会研究コース 大鳥由香子ゼミ)

現代のアメリカは、BLM運動を典型として、さまざまな場面で過去と向き合わざるを得ない状況にいます。そして、私たち自身も、その理由を知るためには、南北戦争や奴隷制といった過去にまでさかのぼる必要があります。つまり、現代のアメリカを理解する上で、その過去に視線を向けることは必要不可欠です。

大鳥ゼミでは、現代のアメリカがどのようにして今日のような姿になってきたのか、文献や史料を通して学びます。特徴は、ゼミ生全員が文献を読んだ上でディスカッションを行うことです。そして、スペイン語科や朝鮮語科など、英語科以外の生徒も参加しており、その関心は外交から経済、音楽、奴隷制まで多岐にわたります。

“All men are created equal”を基軸に建国され、「自由」「平等」「民主主義」の国として知られるアメリカ。しかし、今日では多くの隘路に陥り、その根幹は揺るがされています。その歴史の変遷を、大鳥先生の元と一緒に考えてみませんか？(領家歩希)

(地域社会研究コース 小田原琳ゼミ)

このゼミでは、近現代イタリアについて学ぶことを通して、ある特定の地域を、歴史や文化を含む全体として理解し、その課題を知っていきます。イタリアのみを見つめるのではなく、時間的にも空間的にも広い視野をもつことが求められます。そして、これは、自分自身が生きている社会を問い直すことへとつながります。

具体的には、文献の講読や書評論文の執筆をします。学生が分担して発表し、議論を深めていきます。ただ単に文献を正確に読むのではなく、そこから自分の考えたことを言葉にしてあらわし、先生や他の学生と共有することが重要になります。このような活動を通して、それぞれの学生の興味関心や問題意識にもとづいて卒業論文のテーマを決めます。「学ぶ」ということを通して、自分自身と向き合うことができるゼミです。(小林史緒)

(地域社会研究コース 菊池陽子ゼミ)

私たちのゼミでは、東南アジアに関して幅広い事柄を扱っています。扱う内容は先生の専門領域である東南アジア近現代史だけでなく、学生の関心に応じて決められます。そのため、開発、経済、教育、文化など一人一人が興味ある分野を掘り下げて学ぶことができる点が大きな特徴です。今年度の春学期は東南アジア各国の政治と軍の関係について扱ったあと、それと比較する形でミャンマー情勢とその歴史的背景という、現在の情勢に応じた内容に取り組みました。秋学期では植民地期のカンボジアの新聞である「ナガラワッタ」を扱い、ナショナリズムや植民地の状況についての理解を深めました。様々な関心を持った個性的な学生が集まっていますが、互いを尊重し合う穏やかな雰囲気です。(矢野みなみ、泉俊作)

(地域社会研究コース 木村暁ゼミ)

中央アジアやその周辺地域を対象として、歴史的・現代的諸問題の研究を行うゼミです。対象地域の諸言語で書かれた史資料や文献の講読と議論、自身の卒論に関連した発表を行います。講読では、ゼミ生で協力し訳文・訳注を作成するだけでなく、それを題材にして、書き手の意図や書かれた事象をめぐる背景、そこには書かれなかった事柄についても考察します。そして各自の意見を交換し議論します。発表に関しては、卒論を見据えた先行研究の論評や構想発表を行います。専攻言語や地域、研究関心が多様なゼミ生との情報交換や先生からの丁寧なフィードバックのお陰で、自身の研究を深めていくことができます。地域の諸言語を使い、歴史的な問題あるいは歴史的視座をふまえ現代の問題に向き合うことは難しくもありますが、ゼミ生や先生との双方向の学びを通し、一層その面白さに惹かれていくように思います。ゼミは温かい雰囲気です。皆さんを心待ちにしています。(鍛冶屋沙月)

(地域社会研究コース 久米順子ゼミ)

久米ゼミは美術史・文化史を中心に扱うゼミです。先生のご専門はイベリア半島の中世美術史ですが、西南ヨーロッパ以外にも、ラテンアメリカや中央ヨーロッパ、北アメリカ、東南アジアなど様々な地域を専攻する学生が集まっています。

ゼミでは各自興味のあるテーマについて持ち回りで発表します。質問や意見交換の中で課題が見つかることも多く、実りの多い時間です。ゼミ生の関心が多岐に渡っていることもあり、新しい分野に触れることができるのもこのゼミの魅力だと思います。

自由度が高いからこそ計画的に研究を進める工夫は必要となりますが、先生も学生の関心に寄り添って優しくサポートして下さいますし、発表や卒論の読み合わせを通してゼミ生同士刺激を受け合います。美術はもちろん、音楽や映画、食文化など幅広いテーマの中から、自分の興味を深く探求する素晴らしい経験になると思います。(アドラー陽子)

(地域社会研究コース 倉田明子ゼミ)

倉田ゼミは地域研究コースで「中国近代史、香港・南中国地域史」の分野になります。が!!!歴史は地域史、社会史、文化史など範囲が広く、ゼミ生は各々の興味関心に忠実なテーマ設定をし、卒論を執筆していくのでテーマが多種多様になります。そのため、ゼミでテーマ発表や進捗報告をすると自分とは異なる視点からの意見やアドバイスを得ることができ、問題点の解決や方向性の修正を行うことができます。また倉田先生はご自身に馴染みのないテーマでも調査・執筆方法、修正点などの確なご指導くださるので、「興味のあるテーマ設定をしたいけど書き上げられるか」という不安があっても大丈夫です。かくいう私もその1人であり、先生にとって馴染みのない文化コンテンツの一種をテーマに取り上げましたが、結果我が子のように大切な思いの詰まった卒業論文を書き上げることができました。なので該当地域に興味があり、優しい倉田先生、優しいゼミ生の中で卒論を立派に育て上げたい人には大変オススメのゼミです!(中平青知杏)

(地域社会研究コース 鈴木義一ゼミ)

鈴木ゼミでは、現代ロシアや旧ソ連地域の政治経済、社会などについて学んでいます。ロシアと言えば、「おそロシア」と表現されるように、その行動原理が理解しづらいイメージを持っている方も多いのではないのでしょうか。

しかし、ゼミでは学生の興味関心に沿って、当該地域の国内政治、国際政治、民族問題など幅広いテーマについて学ぶことができます。また事前学習の論文や発表の後には質疑応答の時間があり、先生を含めてゼミ皆で積極的に話し合う雰囲気があります。私自身、基礎的な内容でも多く質問し丁寧な解説を聞いたため、当該地域の政治経済、社会に対する興味がさらに湧き、研究がより楽しくなりました。授業では、資料として実際のソ連時代の百科事典を見たり、留学へ行ったゼミ生のお話を聞くことなどからも当該地域に関する知識を得ることができました。

ロシア、旧ソ連地域の政治経済、社会に関心のある方は、鈴木ゼミで学ぶことをお勧めします。(矢田琴子)

(地域社会研究コース 巽由樹子ゼミ)

私たちの巽ゼミではロシア史、特に近代ロシアにおけるメディア史を扱っています…とはゼミ案内に記載の通りですがこれだけだとなんだかよく分かりませんよね。当ゼミは基本的に誰でもウェルカム!研究テーマも歴史やメディアに限定する必要はありません!現に3年次の自由発表ではアイドルやスポーツ、小説など多様なテーマで発表がされました。もちろんメディア関連をやった人もいますよ。何を研究したいかまだ探している途中の人にもオススメだと思います。

印象に残った授業は、ソ連時代の雑誌を1冊選び書誌情報や内容をまとめて発表するというもの。レポートのために本や論文を探すことはありますが1冊の雑誌に対して出版社や雑誌の特徴、歴史や購買層を調べるといのは未体験の刺激でした。本物の雑誌を手にとれるのも感慨深い!歴史とソ連を感じました。

巽先生も非常に優しく和やかな雰囲気です。ゼミ選択の際はぜひご検討ください!(宮原凜)

(地域社会研究コース 千葉敏之ゼミ)

千葉ゼミを一言で表現するならば、「狭き門より入れ」と私は言うでしょう。この西欧中世史ゼミで学び、その集大成として卒論を書き上げることは、歴史に少々詳しくなるということ以上のものを意味します。まずもって、知的な胆力と足腰が鍛えられます。千葉ゼミの門を叩くということは、大量の欧文文献（恐らく多くの学生にとって未経験ではないかという量）と格闘する生活を始めるということです。悪戦苦闘しながら一つ一つ読んでいくその経験は、気概を養うと同時に、欧文のリテラシーを学術的な水準において確実に高めてくれます。欧州のアイデンティティを醸成した、中世という約千年間を対象に学ぶことは、今の世界を深層から理解する視座を養うことにも繋がります。その深遠さに圧倒され戸惑う私たち学生はきっと、迷える子羊も同然ですが、千葉先生は彼らを導くいわば羊飼いです。ゼミ活動の濃密な時間の中で、歴史家の思考法に触れることができるはずです。自身をさらに高めたいと願う学生には、是非とも「狭き門より入れ」と勧めたいと思います。(今西在知)

(地域社会研究コース 藤井豪ゼミ)

藤井豪先生のゼミは韓国現代史を中心とした歴史学ゼミです。歴史学というと、高校時代の暗記科目の歴史を思い浮かべるかもしれませんが、そんな固定概念を覆し、歴史との向き合い方、歴史の一部である私たちが生きる世界の見方など、幅広く学ぶことができます。学生の関心分野を尊重していただき、歴史学を基盤としたさまざまな角度からのアプローチで理解を深めていくことができます。ご専門は朝鮮解放後八年に焦点を当てた政治思想史です。ジェンダーや人権問題など、現代の社会問題についても学ぶことができます。京都大学で学士、大阪大学大学院で修士修了後、韓国現代史研究の第一人者である徐仲錫氏の弟子として研究し、成均館大学大学院で博士号を取得されています。20年間韓国で研究、活動されていた経歴のため、韓国の実情に詳しく、様々な知見を共有していただきます。韓国・朝鮮半島を研究したい学生に最適です。後輩のみなさんをお待ちしています！（田中千尋）

(地域社会研究コース 舩方周一郎ゼミ)

舩方ゼミの特徴は自身の興味がある研究テーマをバックグラウンドが異なる仲間とのディスカッションを通じて突き詰められるところです。当ゼミは「ブラジル（ラテンアメリカ）を起点とした比較地域研究」を掲げていますが、扱うテーマは多岐に渡ります。例えば3期生はジェンダー・スポーツ・比較政治・公衆衛生に興味があり、毎週扱う内容が異なりました。ゼミにはポルトガル、スペイン、チェコ、ヒンディー、ウルドゥー語科の学生がいます。当ゼミ生は学んできたことや関心が多様です。そのためディスカッションを通じて自分だけでは気づけなかった思わぬ視座を得ることができ、外大の中でもユニークなゼミです。普段のゼミの様子をホームページ masukata-seminar.org で公開しています。昨年は食事会を開催するなどとても雰囲気の良いゼミです。ご興味を持たれた方は是非見学にいらしてください。後輩の皆さんを心よりお待ちしております！（遠藤大輔）

(地域社会研究コース 宮田敏之ゼミ)

タイ語専攻の学生に限らず、東南アジアの幅広い言語を専攻する学生が集い、和気あいあいとした雰囲気の中で意見を交わし合うことができます。特に、東南アジア地域は国や地域によって宗教や生活様式などその文化は多種多様であり、言語もしくり、独自の発展を遂げていることが特徴です。社会情勢も全く異なるため、ゼミでの情報交換は常に刺激的で新鮮でした。それぞれ興味の対象が異なるなかでも、調査や分析の手法について分野横断的に宮田先生にご教授いただけただので、皆が自らの知識や経験の集大成として、自らの言葉で論文を仕上げることもできたと思います。主専攻での学びを経て、ゼミという場で改めて主専攻ではない国や地域の話題に触れることで、多角的な視点を獲得することができ、より広い視点で研究内容を捉え直しながら学びを深められたことは、大変有意義でした。(佐々木優衣)

(地域社会研究コース 宮田敏之ゼミ)

宮田ゼミでは主に東南アジア経済について学びます。しかし一口に経済と言っても、理論や数式を学ぶわけではなく、東南アジアの歴史、政治、文化、社会情勢など、様々な切り口から経済動向を捉え議論を深めます。したがって、経済を一つの軸としつつも、ゼミ生の関心がある分野は多種多様です。私はタイのスマートシティ政策を卒業論文のテーマに掲げていましたが、ある人はタイの現代美術と企業メセナ（企業が芸術・文化活動を支援すること）の関係、ある人はインドネシア人の訪日観光をテーマとしていました。そのため、ゼミ生同士で互いのテーマについて議論を進めると、いつも新鮮な発見があり、自身のテーマについても形式や枠に捉われない研究を進めることができます。地域研究として、自身の関心のある地域について分野を問わず理解を深めたい人は、ぜひ宮田ゼミと一緒に勉強しましょう。(菊池峻汰)

(地域社会研究コース 山内由理子ゼミ)

このゼミは人類学で自分が選んだテーマについて体系的に論じる力をつけることができます。山内先生は学生に応じて適した課題を考えてくださると思いますが、ここでは私のケースを紹介します。ゼミの1年目は人類学の基礎を理解するための文献の読解から始め、実際に人類学の卒論を書くのに必要な背景知識とツールを学びました。その後自分が興味のあるテーマの文献を解読し、自分の考えを今まで学んだツールを生かして論じました。2年目には卒論を骨組みから構築し、文献を読みつつ肉付けしました。考えるのはもちろん自分でしたが、先生はそれを助けてくれるアドバイスとサポートを提供してくれました。個人的な感想は、1年目でインプットだけでなくアウトプットも組み合わせることで論じる力が向上したこと、先生との対話とアウトプットへのフィードバックで考える力と視点が身についたことが何よりの収穫でした。アカデミックな面で1番成長できた時間でした。(M. H.)

(現代世界論コース 小野寺拓也ゼミ)

小野寺ゼミの特徴を簡潔に表現すると、「コツコツ、綿密、静かな情熱」の三点だと思います。三年次は前半に先生の専門である近現代ドイツ史・ナチズム関連の文献講読を通じて、専門的な資料を深く読む練習を行い、後半には卒論執筆の予行練習として8,000字程度の小論文に取り組みます。初めての論文執筆はちょっとヘビーだけれど、問いのつけ方や論文のアウトライン構成・執筆スケジュールの立て方など、論文執筆のプロセスを一から学べます。そして四年次には卒論本番！前年の“練習”を糧にして、一つのテーマにじっくり向き合います。

論文執筆では、書くことそのものと同じくらい、書くための「事実集め」に根気と時間が必要でした。特に小野寺ゼミの主軸となる歴史学では、事実の長い積み重ねを読み解く力が求められるため、文献チェックに骨が折れる日もありますが、玉石混交の情報が溢れる現代を生きる中でも不可欠な、正しい事実を見極める力がつくはずです。(大橋彩乃)

(現代世界論コース 田邊佳美ゼミ)

3年ゼミでは、指定された文献を各自事前に講読し、要約とコメントをまとめておきます。当日は担当者による発表とディスカッションを行います。文献は、ゼミ生の関心に応じて先生が選んでくださいます(例:人種/エスニシティ・ジェンダー・セクシュアリティ・階級など)。この輪読を通して文献を能動的・批判的に読む能力を身につけ、そこで得た知見を自分の問題関心と関連付けて考えを深める能力を養います。秋学期には、4年の卒業論文執筆に向けた研究計画を作成します。輪読では議論が中心になります。そんなに堅苦しいものではなく、皆で和気あいあいと文献の感想や意見、疑問点について話し合っています。ゼミ生の問題関心も多様で、毎回の議論を通して新たな発見があります。また、先生も親身になって話を聞いてくださいますし、文献を踏まえて様々な視点からの捉え方をお話しして下さるので視野が広がります。社会学的・国際社会学的な視点を伴う問題関心がある方、穏やかな雰囲気の中で自分の考えを深めたいという方にはおすすめです！(阿南和香)

(現代世界論コース 中山智香子ゼミ)

本ゼミは伝統ある現代世界論コースの先鋒として、複雑怪奇な世界の探求に挑戦するすべての者に開かれている。本ゼミが求めるのは、自文化の規範と価値観を批判的に捉え、自らのセンスで問題群を発見し、先人の思想と理論を柔軟に吸収しながら問題解決のために思考し、行動できる人間への成長を望む者である。無論だが、ここでは墮落へと至るだけのつまらない馴れ合いは許されない。おのれの魂と実存の徹底的な開示が要求される。これまで太鼓持ちのような「優等生」を続けてきた者には厳しい環境かもしれない。しかし、いきなり言説の戦場へと投げ出されるわけではないから安心されたい。春学期には、教員の手ほどきの下、基本文献の輪読によって思想的な基盤を獲得することが目指される。秋学期には、ゼミ論を執筆することで、自ら思考し、自ら書くという知的な批判力・構想力の涵養に着手する。お仕着せの「お勉強」には充足できない者を私たちは待っている。(長谷川健司)

(現代世界論コース 真島一郎ゼミ)

専攻地域も研究テーマも互いに異なった、じつに多彩な学生が集まるゼミです。卒論の前に、3年次でゼミ論を執筆します。人との繋がりのなかで、でも自力で、論文執筆に本気でチャレンジできる環境です。ゼミ友同士、知識や思考を持ち寄って関わることで、視野を広げつつ自分の問いの本質を探ることができます。

ゼミ選択の時点で、自分のテーマは未定でもOK。こちら自由に設定できますが、ゼミ全体では、「自分がいま世界のどこに立っているのか」を念頭に置いて、各自の問いをたえず開いていくことが大切にされます。

普段はローテーションで論文の構想を発表し、みんなで発表者の相談に乗ったり、議論を行ったりします。真島先生からは、考えるヒントをいただけます。各学生にぴったりの本をよく紹介していただきますが、この本との出会いが針路をしめすこともあります。仲間と刺激しあいながら、自分の問いにじっくり向き合いたい人におすすめのゼミです！(長谷川真子)

(国際関係コース 鈴木美弥子ゼミ)

1、2年生の時、鈴木美弥子先生の法学の講義を履修していた方は、少なくないと思います。この場をお借りして、みなさんに大教室での授業では伝わりきれない先生の素晴らしさとゼミの特徴を紹介します！

第一に、先生は、ユーモア溢れる方で、学生を褒めて伸ばしていただけます。学生の成長を評価したアドバイスをくださるので、前向きな気持ちでゼミの時間を過ごせます。民法ゼミはいつも笑いに包まれています。第二に、法学という固そうで退屈に聞こえますが、ゼミでは自身の興味に応じて学びを深めることができます。また、日々の生活で法律が関わらないことはなく、卒業論文は幅広いテーマから選択することができます。最後に、ゼミには公務員を目指す学生が多数所属しています。民間を含めて、その就職実績も良好です。個人的には、大学の専攻が言語と民法と言えるところが、就職の面接時に有利に働きました。法律に少しでも興味のある方、褒められて成長したい方は、是非、鈴木美弥子ゼミへの入ゼミをご検討ください！(遠藤紗加)

(国際関係コース 中山裕美ゼミ)

中山ゼミでは、安全保障や外交、移民などのグローバル・イシューに、国際関係論の理論を用いながらその原因や解決策について考察できる能力を養うことを1つの目的としています。3年次は主に文献講読とディスカッションを通じて、国際関係論の基礎知識は勿論、卒業論文を執筆する際のテーマの土台を築いていきます。

そして、中山ゼミの最大の特徴でもあります、卒業論文の執筆は他のゼミよりも多くの時間をかけて行います。4年生になる前から執筆を開始し、先生に何度も添削を依頼しながら論文を完成させていきます。添削していただいた文章が赤文字で埋め尽くされていた時や、仮説を立証できそうになく、執筆の途中で軌道修正せざるを得ない時は、精神的にしんどく感じることもあります。しかし、論文を完成させるために闘う学生を、先生は全力でサポートしていただけます。挑戦してみたい後輩の皆さん、ぜひ中山ゼミで全力の学びを楽しんでください。(坂口雅哉)

*サブゼミとは？

本学では、指導教員とは別の教員が担当するゼミを履修することも可能です。このことを、通称「サブゼミ」と呼んでいます。皆さんの先輩の実体験から、サブゼミの利用法を見てみましょう（なお、全てのゼミがサブゼミを開講しているわけではありません。サブゼミを履修する際には、必ずその担当教員と事前に相談しましょう）。

私は、中央ヨーロッパの近現代史が専門の篠原先生のゼミに所属する傍ら、国際関係論が専門の舩方先生のゼミに参加していました。地域社会研究コースでは対象地域と各自の学術的関心に沿ってゼミを選択することが一般的に求められますが、私は自身の興味分野が絞り切れていなかったため、学びの範囲を広く保ちたいと考え、サブゼミを受講しました。本ゼミでは自身の関心分野の一つであった集合的記憶についての知見を深めることができた一方、サブゼミではラテンアメリカや南アジアなど多様な経歴を持つゼミ生の同期たちと共に、比較政治・ジェンダー・健康・スポーツなど幅広い切り口から現代世界を見つめ直す機会を得られ、二つのゼミを通じて自身の興味関心を十二分に探求することができました。現在は、集団と健康というテーマに関心をもっていますが、これは双方のゼミでの学びを通じて得たものになります。サブゼミ受講では予習や発表で求められる労力は大きくなりますが、その分自身の関心と向き合う上では最適な環境を享受できます。自身の関心のある分野がまだわからないと感じる方は、サブゼミを通じて幅広い学域からの刺激を受けることも選択肢に入れてみてはいかがでしょうか。（下田紗英）

私は、本ゼミとして上原こずえ先生の社会学演習、サブゼミとして大川正彦先生の政治理論演習を履修しました。私はフィリピンと日本における社会運動と政治に興味があったので、上原先生のゼミに所属することを決めましたが、政治思想などにも興味があったので、大川先生にメールで相談し、政治理論演習をサブゼミとして履修することを決めました。サブゼミを履修して良かったことは、本ゼミでは具体的な事例を扱った文献を読むことが多かったのに対して、サブゼミではより哲学的なテーマに沿った文献を読むことが多く、それぞれのゼミの良さを吸収しながら、上手く学ぶことができたことです。大変だったことは、どちらも毎週の講読文献があったので、毎回の授業の準備が忙しかったことです。ゼミでは他の専門科目の授業とは違って、演習のテーマをより深く学ぶこととなります。サブゼミを履修するのは大変ですが、その分普段の授業では聞けない話も沢山聞くことができます。（剣持彩人）

私は丹羽泉先生の宗教社会学ゼミに所属しながら、木村暁先生の中央アジア地域研究ゼミにサブゼミとして参加していました。ゼミ選択時点で、既に研究テーマを「中央アジアの宗教とテロリズム」と決めていたので、三年次の春からサブゼミに参加しました。二つのゼミでは、宗教社会的なアプローチを丹羽ゼミで、中央アジアの政治・経済、歴史などの地域研究的なアプローチを木村ゼミで学び、それらを相互的に絡めて研究したことで、自身の研究テーマを立体的にとらえることができました。また、サブゼミでは、研究地域であるカザフスタンの周辺国を研究する学生からの、比較的観点でのフィードバックをもらったことも大きな利点でした。同じテーマを取り扱っても、二つのゼミで違う観点から意見ももらったことは非常に良かったです。もしゼミに迷っているなら、一度先生に相談をしてみるのが良いと思います。（石井伶海）

私が久米先生のゼミを主ゼミとして、岡田先生のゼミをサブゼミとして選択したのは、自分の進路選択をする上で、アート関係か、教育や国際協力関連に進もうか、迷っていたからです。私の選んだ2つのゼミはコースが異なり関連性も低いのですが、両方受けたことに非常に満足しています。私はゼミ選択後も自分のキャリアや卒論の方向性についてずっと悩んでいましたが、実際に両方のゼミを受け、ゼミのメンバーと関わり、論文を書く勉強をしつつ、課外活動や仕事経験を経ていくうちに、将来自分のやりたいことが見えてきました。その時間を与えてくださったフレキシブルな2人のゼミの先生に非常に感謝しています。ゼミは自分の興味を深掘りし、先生やメンバーと関わりキャリアを考える機会になります。サブゼミを活用すればその機会が2倍になります。とても良い制度だと思いますので是非気軽に活用することをおすすめします！（杉田美夢）

私は、東南アジア経済論ゼミ（本ゼミ）と東南アジア島嶼部歴史社会論ゼミ（サブゼミ）との2つのゼミに所属していました。東南アジアについて満遍なく学び、また2つのゼミで幅広い問いに触れる中で、知的好奇心を満たしつつ真に関心のある研究対象を見つけたかったからです。私は最終的に、「企業」という存在に興味を持ち東南アジアの財閥同士の資本提携についての卒業論文を執筆しました。経済系のテーマではありますが、そもそも「企業」に興味を持ったのは、本ゼミの影響は勿論、サブゼミで「国家」や「民族」といった切り口で世の中を分析する仲間から刺激を受け、自分は「企業」という切り口で世の中を分析したいと思ったことや、サブゼミの先生に勧められた書籍に刺激を受けたことも大きな要因でした。もし興味関心の対象をまだ絞れない方は、サブゼミを履修することで存分に知的好奇心を追求した上で研究テーマを選んでも良いのではないのでしょうか。（上月健）